

児童書がもたらす様々な喜び



カリーナ・ボラスコ (フィリピン)
アンヴィル出版社 副ゼネラルマネジャー・編集者・詩人

読書を楽しむ子どもの顔は輝いています。子どもたちは読書を通して、外の世界は広いと益々強く思うようになります。子どもたちにとって読書は生涯の趣味となり、また生涯の読書家は、読書に対する強い思い入れ、忠誠心から、ある本を何としてでも手に入れたという衝動を常に抱えています（だからこそ良い図書館が読書家には絶対に必要なのです。）概して読書家は、技術（読解力、鑑賞力、言語力）や知識の点だけでなく、以下の点でも特別な存在です。つまり読書家は、他者の考え方に対して開放的で受容性があり、自身や他者の感情や思いに敏感でありながら、他者が社会の規範として受け入れている事柄に対しては批判的なのです。読書家の世界が他の世界と比べていかに進んでいるかは、社会学の論文を読まなくても明らかです。

私が児童書を出版する際や、先生が生徒に教室で児童文学を教える場合、あるいは両親が子どもにベッドで物語を読み聞かせるときに、実は大人は、児童書の中でかつて自身が見つけた喜びや楽しみを子どもに伝え、共有したいと考えているのだと思います。児童書のもたらす喜びは子ども時代の最も深遠な思い出の1つであり、本の世界に没頭し、挿絵を見て何度も我を忘れて別の世界に飛んで行ったときのことを、大人は思い出すのです。そして大人になって無数の書物を読んだ後でも、新しい児童書のページを開く度に、その世界に魅了されるのでしょうか。読書の習慣や嗜好は人との出会いや出来事を通して変化していきますが、児童書のもたらす根本的な喜びは、著者が書くことによって得る喜びと同様に、読者から読者へと伝わり、味わい尽くされるのであり、決して変わることはありません。そして驚くべきことには、子どもに適した本を制作したとき、あるいは与えたときには、その中のどこに喜びや楽しみがあるかを子どもに伝える必要はありません。子どもたちはそれを、本を開いた瞬間に即座に感じ取るからです。私は出版者として、作者と読者の両方が喜びを共有できる本が成功すると常に考えています。そしてこれは、児童書の場合に特に当てはまることなのです。

フィリピンの問題点として、フィリピンの児童書には作家から読者に伝えるべき喜びが見当たりません。フィリピンには子どものための若い作家の組織があり、おもしろおかしく地元のタガログ語で KUTING (猫) と呼ばれていますが、これは実は Kwentista ng mga Tsikiting (「児童のための物語作家」を意味し、tsikiting はタガログ語で子どもを意味する俗語です) の頭字語です。ですがこの組織は、子どもが読んで楽しめるような本を全く

出版していないのです。アーティストやイラストレーターの想像力や空想力は以前よりも増えています。また児童書の制作、配給、販売についても、物理的に進歩しているはずで（アートの技術やカラー印刷、優れた印刷や良質の紙、本を受け入れる多数の書店や図書館の存在など）。ところが、読書の楽しみ、喜び、創造性、ファンタジーがフィリピンの児童書には存在しないのです。これは今私たちが直面している最大の問題だと思います。フィリピン人は元々陽気で楽しい国民性なので、過去 70 年ほどにわたってアメリカの児童書が読まれてきたことはフィリピンにとってはとても残念なことです。

フィリピンの作家は若くて活発であるにもかかわらず、道徳と教訓の長い伝統（スペインがフィリピン人を敬虔なカトリック教徒にしようと試みた 400 年前から続いています）の前に、無意識のうちに押しつぶされています。フィリピンの子どもたちは、先生や両親から本を読むたびに「この話の教訓は？」と、なすすべもなく聞かれ続けています。フィリピンの若い作家たちは、社会の悪を子どもに教えるような深刻で重々しい話でなければ本として意味がないという考え方を捨て去るべきです。そうでなければ、話がやたらと冗長になり、想像力の入り込む余地がなくなってしまいます。

フィリピンには様々な問題が山積していますが、上の世代はこうした問題に対して単に解決を期待し、やり過ごしているように下の世代には見えているに違いありません。実際にその結果、貧困、離婚、外国に出稼ぎにいて不在の両親、同性愛、近親相姦などの問題が、次の世代の肩に負担として大きくのしかかっています。ですが、読者に問題を押し付けることなく、問題を解決する方法があるはずです。作家は、読者や聴衆に貧しい思いをさせずに貧困について語るができるはずなのです。フィリピンには 0~14 歳までの子どもが 3,000 万人もいますので、これは非常に大きなマーケットであり、様々な種類の物語を作り出す莫大な余地が残されていると思います。